
悪魔王ナノガイガー 第四部・決戦編

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔王ナノガイガー 第四部・決戦編

【Nコード】

N0674T

【作者名】

かがみん

【あらすじ】

悪魔王ナノガイガーシリーズ 完結編です。

プロローグ 出撃

払暁の空に、曙光が射した。
透明な、澄んだ色の光である。

機動勇者隊の会議が行われてから、五日が過ぎていた。
この間、懸念されたソール11遊星主の再襲は全くなく、その行動は管理局の監視網にも観測されなかった。
そのおかげか。

はやてはどうか、攻勢準備を完了させることが出来、ほっとした
思いで朝を迎えている。
態勢を整えた機動勇者隊は、双つの部隊にまとめられた。

一つは、ピサ・ソールを攻める管理局艦船アースラを主力とする部隊。
もう一つは、遊星主旗艦ピア・デケム・ピットを牽制する、赤の星

の戦艦ジェイアークを主力とする部隊である。

ジェイアーク艦長、ソルダートJにはまた、ピア・デケム・ピットに捕われたアルマ・戒道幾巳の救出も目的の中に含まれていた。

そうして、五日目の午後、ミッドチルダの管理局地上本部で打ち合わせを済ませ、翌朝部隊は出立と相成った。

「やっと戦える……ヴィヴィオを取り返すための」

高町なのはの心境を偽らずに記せば、このようになる。
が、隊長である彼女が公的な場で私欲を優先させるような発言をすることはない。

エースとして、遊星主の野望を阻止し「全てを守る」ことが任務だと心得ている。

母の顔を封じて、管理局の魔導師を貫いた態度を取っていた。
ただ、幼なじみのフェイトだけは、彼女の胸の内を読んでいる。

「大丈夫、きつと、ヴィヴィオは無事に助けられるよ」

別れる前、フェイトはなのはにそう囁いた。

なのはは小さく頷き、微かに微笑んだ。

次元空間航行艦船・巡航L級8番艦アースラ（正確にはアースラ改）には、なのは、凱、そしてスターズ分隊・ヴィータ、スバル、ティアナ、シャマル医師が搭乗する。艦長はJS事件に引き続いて、はやてが指揮する。副官にはリンフォースIEEが就く。
オペレーターにアルト、パイロットはルキノが担当する。

一方。

超弩級戦艦ジエイアークには、フェイト、護、ルネ、ライトニング分隊・シグナム、エリオ、キャロ、シャリオが乗った。

ソルダートJと生体コンピューター《トモロ》が艦体制御を統括して行っているため、アースラのようにオペレーター人員はいない。
かわりに戦闘要員である武装隊が数十人、フェイトの指揮の下乗艦している。アースラの方も同様であった。

このあたりは、次元航行部隊の標準に則った配置にしてある。

「よし。全員乗り込んだな」

はやては艦長席に腰を沈め、最新状況をチェック。部隊は次元空間での戦いを想定して、二艦にそれぞれ四隻の艦船が付き従っている。この、二個の分艦隊が作戦遂行にあたるのだ。

「じゃあクロノくん、あとは任せたよ」

「ああ。気をつけていけよ」

次元航行船クラウドディアのブリッジから、クロノ提督が返してきた。クラウドディアはいま、第一世界ミッドチルダの衛星軌道上にいる。そこから、旅立つ艦隊の姿を見守っていた。

ミッドチルダの守りをクラウドディアに委ね、アースラ、ジェイアーク率いる部隊は、遊星主の基地たるピサ・ソールに向けて出撃を開始しようとしている。

それより少し前。

獅子王凱は、未だ昏睡状態にある卯都木命を見舞っている。

「それじゃあ、俺、行ってくるよ。……帰ってきたら、起きてくれるといいんだけど、な」

凱は恋人に口づけを与えると、決然とした表情で、聖王医療院の病室を後にした。

それから。しばらく時間が経ったあと。眠る命の額に、星の様な煌めきが輝いていた事を、凱は知る由もなかった。

「発進」

部隊は遙か次元の海の彼方　物質復元装置・ピサ・ソールを目指して出立した。

奇襲作戦では速やかなる攻勢が必要となる。それには、ジェイアークのES兵器を用いたエスケープ空間を経由した攻撃が最適と決められた。

緊張感を孕んだまま、艦隊は飛ぶ。

目標地点まで、艦隊は極めて隠密を心掛けて進んでいった。
だが。

ミッドチルダを少し離れたところで

「巨大物体、接近！」

「ソルダート」、この反応は……ピア・デケム・ピット！」

「来たか！」

「やはり、うちの行動を読んどったか？」

威容を現した、飛行空母ピア・デケム・ピット。
アースラを邀撃するような進行である。

これまで何の音沙汰もなかったのが不思議だったのだが、ついに動き出したようだ。おそらく、密かに管理局を監視していたのである。連中がおとなしく静観を決め込むはずはない、と、これははやての思っていたことである。

彼女等には預かり知らぬことであったが、実は遊星主は、本局で失った戦力を復活させ、地上への大攻勢を仕掛けるつもりだったのである。

その用意が整うまで、彼らもまた、管理局と等しく日数を要したというわけだ。

そして、アベルはミッドチルダを破壊し、ジュエルシードを用いた儀式を執り行う所存である。

こうして。

ミッドチルダ防衛を懸け、ソール11遊星主と機動勇者隊との間に、戦端が開かれた。

ブログ 出撃（後書き）

かくして、最終決戦が始まります。

更新までしばらくお待ちください（仕事が忙しくなかなか書けませんがお許しの程を……）。

第一章 希望のアースラ

赤の星で産まれた艦たちの戦いは、ES兵器の応酬よりスタートをきった。

「J!」

超弩級戦艦ジエアイークはアースラの身を庇う様に軌道を変え、敵の巨大な飛行空母ピア・デケム・ピットと応戦した。ソール11遊星主の旗艦ともいえるピア・デケム・ピットは、ジエアイークにも匹敵するほどの戦闘能力を有する。

「こいつの相手は、私が引き受けた!」

Jは創造主・アベルと対決する意思を告げた。

ESミサイルが互いの艦体から発射される。空間跳躍能力を持つこの兵器は、エスケープ空間を通過する事で、ミサイルは障害物に邪魔されずに目標を直接、爆破できるのだ。

光爆の連鎖が、闇の世界を鮮やかに照らしだす。

それは美しくも戦慄を伴う光景だった。

強力なジェネレーティングアーマーと自己修復力があるピア・デケムとジェイアークはさほどのダメージを受けずに軽く済んだ。しかし、はやてが指揮するアースラ等、管理局の次元航行船は防戦一方であり、被害もあつたようだ。

「反中間子砲！」

主砲斉射をJは指示した。

アベルもまた、ピア・デケムに次の攻撃を命じた。

「小型艦載機を出しなさい！」

空母の甲板から、夥しい数の艦載機が飛び出してきた。

これは無人で動く兵器であり、ピア・デケム・ピットは内部でこれを無限に生産する事ができる。ジェイアークは、反中間子砲、十連メーザー砲を駆使して撃ち落とそうとした。

ガジェット同様、感情なき兵器ゆえに、我が身の大破を顧みることない体当たりを仕掛けてくる。ジェイアークの迎撃により次第にその数を減らしていくが、殲滅には時間がかかる。

「はやて、早く……ピサ・ソールに向かえ！」

Jは後方で防御陣形を取るアースラに言った。

「アベルは私が倒す。貴様は一刻も早く、ピサ・ソールを……」

アースラと他の管理局の艦艇は、特に武装を施してはいない。もと

もと、管理局には戦艦という概念が希薄である。古代ベル力ならいざ知らず、現代のミットチルダには質量兵器を抱える理由がない。

ただ、アースラには魔導砲・アルカンシエルが装備されている。これは対象を完全に殲滅するためのもので、過去に《闇の書》の防御プログラムを破壊する等に使用されていた。

強力すぎるため、おいそれとは使えず、管理局より許可が下りないと発射できない。

例えば、GGGがバイオネットの獣人にゴルディオン・ハンマーを振るえないのと同様に、対生物に使うのを暗黙的に禁じられていた。また、チャージにも時間がかかる。

ピア・デケムに放つても、威力が大きすぎて、人質となった戒道幾巴やヴィヴィオまで消滅させてしまうだろう。

むしろ、それはピサ・ソール破壊に使うべきだ。

アースラには、それ以外にも対ピサ・ソール用の装備が積まれている。

「ここで貴様らができる事など、たかがしれている」

いささか、辛辣な口調ではやてに言う。

「ピア・デケムを抑えるのは、私とフェイトに任せてもらおう！」

「わかった」

はやては頷き、艦隊に全速力でピサ・ソールの方向を目指すように指令する。

「ピサ・ソールに向かうつもりですね。なれど……」

アベルは、控えていた遊星主たちに出動を命じる。

「我等に刃向かう愚かな連中を、撃破してくるのです！」

ピルナスを除いて、一言も発さず、遊星主たちが次元の海に乗り出す。

艦外に出た遊星主はパーツキューブで移動し、滑る様に管理局艦隊に近づく。

「敵襲来ます！」

はやてのいるブリッジに、ルキノの緊張した声が響いた。

「臨戦体制」

「ソールウェーブ発射」

パーツキューブから、無限情報サーキット・ラウドGストーンのパワーを集めたエネルギー波が放たれた。

「……」

船体を護る防御フィールドを最大にして、アースラは攻撃に耐えた。だが、これでは手足を封じられたも同然。反撃が必要だった。

「俺が出る！」

獅子王凱は素早く立ち上がると、船外への転送を頼んだ。

「俺ならいける!!」

通常の魔導師ならば、フィールド系の防御魔法を使ったとしても、次元の海での活動は危険が付き纏う。いかに、高ランク魔導師であっても人間にはかわりない。無重力、空間の歪み、人体に有害な物質や放射線……万が一、魔法で対処しきれなければ一貫の終わりである。

だが。超人エヴォリユダーなら、話は別だ。

生身でありながら真空の宇宙で自由に動ける、強靱な肉体。そして全身の神経がネットワークを形成した特殊な生体能力。かてて加えて、今は魔法もある。

凱なら、船外でも遊星主と戦えるだろう。

「僕も行くよ」

天海護も名乗りをあげた。

浄解モードになれば、凱と同じく生身でも宇宙に出れるのが彼だ。しかも、サイコキネシスなどの超能力が使える。

「宇宙での戦いなら僕にもあります。凱兄ちゃんと一緒に戦わせてください」

「よっしゃ、あんたたちに任せるわ」

はやては手早く断を下し、二人を次元の海に転送した。

「短時間なら、私たちも外で戦えるよ」

と、高町なのはが進言したが、

「たぶん、うちらでもいけるやろうけど……ここは奴らの得意なフィールドや。万が一。こんなところで切り札を失ってしまったら……」

はやては唇を噛んだ。

「隊長、ルネさんが……」

「消えた？」

Gストーンサイボーグ・ルネ・カーディフ・獅子王は、このような時におとなしくしているようなタマではない。

シャッセルでは独断専行をよく注意されていたが、ここでもその性格を発揮している。

こうと思ったら許可も待たずに動いてしまう。

それは地球を離れる前、オービットベースにおいても見られた事だった。

サイボーグである事実が無茶な行動を起こさせるのか……ルネは魔法の助力もあつてか、熟慮もなく、ハッチからアースラの外に出た。

(今度こそ、遊星主をぶっ潰してやる)

ルネの姿に、凱は驚いたが、戻れとも言えず、共に遊星主と戦おうと決めた。

少し離れた宙域では、ジェイアークがピア・デケム・ピットと交戦している。

やがて、パーツキューブに乗った遊星主が迫って来るのがアースラから見えた。

遊星主……ピーヴァータ、ポルタン、ペルクリオ、ピルナス、ペチ
ユルオン等と、凱、護、ルネ達が一進一退の攻防を続けている。
ジェイアークはピア・デケム・ピットの小型艦載機の群に苦戦して
いた。

戦闘中、遊星主達は突如、向きを変え、後退をはじめた。

(逃げる……!?)

戦力差では、あちらの方が有利なはず。
それなのに、彼らは相手から離れ、逃走としか思えぬ速度で去って
いく。

「逃がすかよ!」

魔力で加速したルネが、遠ざかるピルナスを追う。

凱と護も、逃げた遊星主を追いかけた。

遊星主たちは、高速で闇色の空間を駆ける。

その軌道は当初ばらばらであったが、次第に向きを相転じて、同じ
方向へと一直線に加速していった。

「ミッドの方に向かって……!」

畏か？、と凱が思った時には、すでにアースラからかなり引き離されている。

アベルはにやり、とほくそ笑んだ。

「首都を襲うつもりか　！？」

はやてはミッドチルダに引き返すべきか、逡巡する。

「私たちの役目はピサ・ソールを破壊することよ、はやてちゃん」

なのはの言葉は、叱責を含んでいるような気がする。

「迷わず、進むのが……」

戦いを終わらせる早道なのか。

「ミッドチルダにはクロノ君もいる　それに、凱さんたちも追っている……」

地上には、留守を守る部隊も警護を厳しくしているはずだ。

それでもはやての不安は消えなかった。

そこで、増援として、スターズ・ライトニングの精鋭をミッドチルダに送ることにした。

ピサ・ソールの方は、ギャレオンが居ればなんとかなるだろう。

「スバル、ティアナ、ヴィータやシグナムと一緒に地上を守って」

「お任せください！」

声高く、胸を張って彼女達は答えた。

艦艇の一隻に移り、急いでミッドチルダに飛ぶ。

一方、Jも、キャロとエリオに同じ事を命じていた。

「おそらく、地上でジュエルシードの儀式を行うのだろう……」

Jはそれを阻止しなければならない、と強く言った。

「わかりました。僕たちが必ず儀式を止めてみせます！」

J S事件で逞しく成長したエリオが頷いた。

「よし、私について来い！」

シグナムが二人を促す。

「テストロツサ、そいつの相手とピサ・ソールの方は任せただぞ」

「ええ。地上の平和を頼みます」

そう告げるフェイトはみんなの勝利を祈りながら、敬礼した。

遊星主はただならぬ速度で、ミッドチルダに向かっている。

それを部隊を乗せた艦艇は猛追した。

「アースラも急ぐで！」

はやての号令の下、艦は出力を上げる。

その行方を妨害する様に、ピア・デケム・ピットが立ち塞がることした。

「ここでジェイアイク共々破壊してあげます……!!」

アベルは攻撃の激しさを増した。

「貴様の相手は私だという事を忘れるな！」

白き戦艦は苛烈な反撃を敵へと食らわせる。

「お前達はピサ・ソールへ……!!」

「わかってる。アースラ最大艦速!!」

「さあ、アベル。決着をつけてやるぞ！」

「は不敵に叫んだ。

「懲りない人ですね」

アベルの冷笑は崩れない。

「徹底的な敗北を与えてあげましょう……創造主の手で!!」

冷徹な瞳に、黒い炎が一瞬、踊った。

「ギガ・フュージョン!!」

ピア・デケム・ピットは、アベルの命令により変型していく。

「ピア・デケム・ピーク!!」

超巨大ロボットへと変わったピア・デケムは、ジェイアークに鋒先を向ける。

「ふっ……望むところ」

「は遠ざかっていくアースラ分隊の姿を確認した。

「勇者よ、行くがいい……希望とともに」

「」、ピア・デケムが……」

フェイトの声に頷き、「はペンチノンに言った。

「こちらもフュージョンするぞ」

「新しい機能を試すのか!？」

「ああ……!!」

対遊星主戦のために組み込まれた新機構を、いま、試してやるぞ。
「はフェイトを振り返った。

「いくぞ、フェイト」

「ええ」

フェイトがバルディッシュを取り出す。

「見せてやろう、アベル。ジェイアークの新しい力を、な！」

ジュエルジェネレーターの出力が上昇した。

「何をするつもりです？」

怪訝そうにアベルが呟く。

「雷光よ、不死鳥に」

「新たなる翼を与えよ」

重なる、力。

「バルディッシュ！！」

《Fusion Mode・GetSet》

二人がいるブリッジを……いや、超弩級戦艦自身を、まばゆい金色の輝きが包み込む。

「こ、これは？」

瞠目するアベル。

「いつものフュージョンではない……！？」

」と、バルディッシュを構えたフェイトが手を握り合う。

そして、跳躍した。

「「テラ・フュージョン！！」」

宇宙最強と謳われる戦艦が、姿を変える。

不死鳥は、金の閃光をまとって復活したのであった。

「ゴッド……ジェイダー！！」

第一章 希望のアイスラ（後書き）

ぶつかり合う、ゴッドジェイダーとピア・デケム・ピーク……！

次回、第二章「雷光の戦士」に続く！

第二章 雷光の戦士

……かつて。

ヴォルケンリッターと初めて干戈を交えた際、《魔導師の杖》と《閃光の戦斧》は手酷い敗北を喫した。その時、デバイス達は二度と主を傷つかせまいと、ある決意をした。

さらに速く。さらに強く。護るために。

当時、一部の者のみに受け継がれていた、古代ベルカ式の技術。カトリッジ・システム。

それを自らの意思で自分達に取り入れさせたのだ。そうして新生したデバイス達は、極めて強力な力を発揮するのだ。た。

それから、デバイス達は戦う度に進化し続けてきた。

今度もまた……。

バルディッシュ・アサルトは、レイジングハート・エクセリオンに続いて、Gストーンを組み込んだ新しいデバイス《G式》として生まれ変わった。

新しき名は、バルディッシュ・ダイナスト。

Gストーンの特長として、機械との親和性が挙げられるが、G Sライドをデバイスに組み入れたことにより、レイジングハート同様のフュージョンが可能となった。フュージョン・モードに移行したバルディッシュは、フェイトの防護服を生機融合に適したものと改変する。黒を基調にした、フュージョンジャケットの胸元に、バルディッシュが金色に輝いていた。

『テラ・フュージョン!!』

ソルダートJとフェイトの声が重なる。

ジェイアークは、ジェイバードとジェイキャリアーに分離、同時に変型しながら合体を果たす。

通常と変わらぬ、ジャイアントメカノイド・キングジェイダーの合体プロセス。

だが。

それにより誕生したのは、いつものキングジェイダーではなかった。

フェイトがフュージョンしたことで、魔力運用が可能となり、バルディッシュもジェイアークのシステムにも干渉できるようになった。バルディッシュは己の形態変型機構プログラムをペンチノンにインストールし、キングジェイダーは戦闘状況に合わせた変形を獲得。そしてさらに、GストーンとJジュエルの共鳴で発生する莫大なエネルギーが、キングジェイダーを強大に進化させていた。

王を超え、皇帝を超え、神へ生まれ変わる、その威容

巨神ゴッドジェイダーがここに降誕した！

白と黒の機体に、まばゆい黄金の光が混ざり合う。

右腕部はレプリファイガー戦で失ったジェイクオースに替わって、ジェイストライクが装備されている。それは、金色の鎗といった風情の武装だ。

背には、輝く赤焰の翼。巨神は悠然と四枚からなるその翼をうち振るわせる。

(力が……！)

(湧いてくるっ！)

GとJの共振現象が、無限大ともいえるパワーを二人に与える。

闘志が充満したサイボーグと魔導師は、喫と、アベルに視線を向けた。

「どんな改造を施したか知りませんが……それでこのピア・デケム・ピークに克てるんでも」

一瞬の動揺を沈めてアベルが攻撃を命ずる。

「この世界の塵と化しなさい！」

ピア・デケム・ピークはこの敵に強力な重火器を全て撃った。

「バルディッシュュ！」

《Defensor》

すかさず、《ディフェンサー》を発動。ゴツドジェイダーの前に展開したそれは、通常の数百倍の大きさを誇っていた。

G式デバイスにより変換される魔力量は、人間単体を遙かに越えたものだ。

故に、普通の魔導師では扱えぬ、効果を拡大した魔法が操れるのである。

光の爆発がゴツドジェイダーを覆い隠した。

「効きませんか……」

ミサイルとビームによる攻撃は防がれた。

ならば、と、アベルは格闘戦に打って出る。

だが、それこそ、ゴツドジェイダーの思う壺だった。

「うっ！？」

突然 アベルにはそう思えた。ピア・デケム・ピークは衝撃と共に吹っ飛んでいた。

「どっした？ 我らを倒すではなかったのか」

」には余裕がある。

「な……今のは」

アベルには、ゴッドジェイダーの動きが感知できなかった。接敵する前に打撃を食らっていた。

「今度はこちらから行くぞ!」

消えた。少なくとも、遊星主にはそういう風に感じられた。

そして、ピア・デケム・ピークは再び横殴りの一撃を受けてよろめいた。

「ぐわっ……!？」

遊星主において屈指の速度と攻撃力を誇るピア・デケムが、ゴッドジェイダーの動作を見切れない。それは、まさに、闇を裂く稲妻。その攻撃を回避すること叶わず、一方的に翻弄されている。

「ば、馬鹿な。なんなのです……この力は!？」

愕然とする、アベル。

炎の翼を広げ、ゴッドジェイダーはピア・デケム・ピークの胸を打ち砕いた。

金の閃光と異名を持つ空戦魔導師フェイトがフュージョンしたゴッドジェイダーは、物体加速の魔法を使用できる。音速を凌駕するスピードを手に入れたゴッドジェイダーは、凄まじい猛撃により、ピア・デケム・ピークを追い詰めていった。

「い、いいのですか……このまま攻撃を与え続ければ、アルマの身

も……」

「それは即刻承知だ！」

」の鋭い声が飛んだ。

「アルマも戦士として生まれてきたのだ。敵を倒すためならば、死ぬのは本望であろう……」

(「……!」)

その言葉に、フェイトは驚き、アルマは憎々しげに返した。

「ソルダートが忠誠を誓ったアルマを見殺しにするとは。やはり、貴方は機能が狂っていますね」

「欠陥品の創造主に言われたくはないがな」

「アルマを本当に殺すつもりですか!？」

「ふっ……貴様もろともな！」

ゴッドジェイダーが疾駆する。右腕のジェイストライクを起動。光の槍が放たれる。

ピア・デケム・ピークは砲撃で撃ち落とそうとした。だが、その弾幕を振り払い、ジェイストライクはジェネレーターイングアーマーを貫いて、ピア・デケム・ピークの肩を破壊する。

『うわあぁっ！！』

戒道の苦痛に満ちた悲鳴があがった。

「くっ……本当に、アルマを……！？」

アベルは唇を噛む。

戒道は苦しみながらも、Jの行動を意識の底で讚えていた。

(そうだ……それでいい J)

メインコンピュータの代わりにピア・デケム・ピットに接続された戒道は、機体に受けるダメージを直接フィードバックされる仕掛けになっている。

その痛みに喘ぎながら、戒道はJの勝利を願っていた。

(僕の事など構わず……アベルを……倒し……て……！)

「J、本気で彼を ……？」

「もとより、覚悟の上ではある」

冷徹と、Jは言った。

「だが、それはあくまで最後の手段……」

「じゃあ……」

「この私が本当に、仲間を見殺しにするような者と思ったか？」

「いえ……」

と、答えながらも、フェイトは一瞬でもJを疑った自分を、密かに羞じていた。

(ええい、もう。仲間を信じられなくてどうするのよ！ 私ったら……)

「フェイト。魔法でここからアルマを転移させられないか？」

Jが訊いてきた。

フェイトは眉をしかめ、首を振る。

「うーん……転送魔法なら、私の使い魔のアルフか、無限書庫の司書長・ユーノの方が得意なんだよね……」

フェイトは幾つか、次元転送や転移の魔法を使えるが、それらの補助系魔法はどちらかと言えば不得手なほうだろう。

技術的に細かい調整が必要であり、フェイトといえど戒道のみ転送させるのは難しい。

どのみち、ピア・デケム・ピットにはナンバーズのウーノが乗艦していたのだ。恐らくなんらかの対魔導師用に抵抗策（AMFのような）を講じてあるに違いない。

「では、できないのだな」

得心し、Jは次の質問をした。

「では、奴の動きを止められるか？」

「拘束ってこと？」

あのように巨大な物体に、バインドを使った魔導師が、さて、果たして存在したであろうか。

「それなら出来ると思う」

今のフェイトならば。ゴッドジェイダーから溢れるパワーがあれば。バルディッシュユが可能と計算した。

「よし。では奴を拘束してくれ。私は、ピア・デケム・ピークに乗り込む」

決然と、告げた。

「わかった」

虎穴に入らずんば、虎児を得ず。幼い頃に習った故事を、フェイトは思い出した。

「だが、アベルには私がアルマを見殺しにした、と思わせねばならぬ」

こちらの意図を悟られず、ピア・デケム・ピークに侵入するためには、あくまで、アルマごとアベルを攻撃すると見せ掛けねば救出に失敗するかもしれない。

それゆえに」は演技とも思えぬ冷徹さを貫き通した。

「この……！」

ついに怒りをあらわにしたアベルが逆撃をはか図るが、ゴッドジェイダーはものともしない。

ESミサイルと五連レーザー砲に加え、フェイトは無数の発射体を作りだし、相手を牽制する。

「プラズマランサー……！」

数百の発射体から雷光を纏った矢が、ピア・デケム・ピークの巨体を狙った。

「ぐああっ……！」

被弾した痛みにも、戒道が悲鳴を上げた。

「アルマ……すまん、許せよ」

Jは眩き、再度ジェイストライクの発動準備に入る。

「くっ　　パルパレーパを呼び戻すのは……間に合わない……」

今頃、パルパレーパはアースラ勢力と交戦中であろうか。

「ライトニングバインド」

かつて。なのはと戦った時、フェイトはライトニングバインドで動きを封じ、フォトンランサーで畳み掛けるという戦術を選択した。

今回ののは、それをさらに大掛かりにしたもので、雷撃の戒めが巨体を拘束する様は類例のないスケールだ。

「っ………！ 機体が動かない!？」

バインドの拘束力でピア・デケム・ピークは攻撃ができない。そこを、ゴッドジェイダーが撃つ。

「バルディツシュ………！」

ゴッドジェイダーの周囲に幾つものスフィアが生成された。それらには雷が弾け、白熱した輝きを放っている。同時に。

ジェイストライクから数百メートルはあろう雷光の刃が生まれた。

「雷光一閃!！」

出力最大っ!!

「プラズマザンバーブレイカー!!！」

対《闇の書》事件で使われた、砲撃魔法!

「はああっ!！」

「うわあああ」

ピア・デケム・ピークの胸に、プラズマを纏った砲撃が叩き込まれた。

その威力は凄まじく、ジェネレーティングアーマーを崩壊させ、堅固な装甲を破碎した。

「今よ、J!」

「うおおおっ」

フェイトが魔法でピア・デケム・ピークの一部を破壊し、そこから内部にJが侵入する。そのような計画を二人は立てていた。

飛鳥の如く、フュージョンアウトしたJが飛び出す。
ゴッドジェイダーの操作はフェイトに任せていた。

「ぬおおっ」

砕けた装甲から、ピア・デケム・ピークの中に入る。
目指すは、メインコンピュータールーム。

むろん、ただで通してくれるはずがない。

ミッドチルダに向かわなかった別の遊星主がJを阻止しようと、現れた。

だが、彼らは地上と違い、ピア・デケムの機体を破壊するのを憚り、十分な攻撃ができない。

「Jめっ……」

アベルは不敵な行動を取ったJに、苛立ちを覚えた。

(「J………僕の救出は置いといて、早く………アベルとピア・デケムを………」)

朦朧とする意識のなかで、戒道は自分より遊星主を倒す事を優先するよう願っていた。

だが、ソルダートがアルマ守護の誓約を破ることは有り得ない。
」はまず、戒道を救い出してから、ピア・デケム・ピークを完全破
壊するつもりだった。

「そうそう、貴方の思惑通りに進めてたまるものですか……！」

アベルは切り札の使用を決めた。

「いいでしょう。貴方がピア・デケム・ピークを破壊したいのでし
たら、やらせてあげますよ」

ただし。

「ここで滅びるのは私ではなく、貴方ですがね……！」

至急に、アベルはピサ・ソールに命令を送った。さらにはフュージ
ョン中のピア・デケムにも指示を出す。

「ジュエルジェネレーターの出力を」

ピア・デケム・ピークの巨体からエネルギーの上昇を読み取ったの
は、ジェイアークの生体コンピューター《トモロ》である。

「これは……ジュエルジェネレーターが暴走しているようだ」

計測されたデータから、ペンチノンはピア・デケム・ピークの異変
を感じ取っていた。

「どういう事？」

フェイトが疑問に思って訊いた。

「ピア・デケム・ピークの動力……ジュエルジェネレーターの出力が上昇を続けている。このままリミッター限界を越えたエネルギー放出を続けると、機体が爆発する」

「つまり……」

「おそらくは、自爆だ」

間もなく、ジュエルジェネレーターはピア・デケム・ピークの制御限界を越えた。

「Jー！」

フェイトは急いでJを救う手立てを講じた。

「くっ。アベルめ、同じ手段を使うか……」

蜥蜴の尻尾切りだ。

Jと戦っていた遊星主は、アベルの指令を受けて戦場を離脱している。機内に残されたJは、戒道の姿を求め走った。

「アルマにはまだ利用価値はあるので死なせはしません。だが、J-002。貴方はこの場で消えてもらいます」

既にアベルらは撤収する準備を終えていた。

ピア・デケムもフュージョンを解いている。
ピア・デケム・ピークはピア・デケム・ピットに戻っていた。

「くそっ、アルマごと私を……消すつもり、か」

「Jはアベルが戒道連れて脱出したことを知らぬ。

戒道はピア・デケム・ピットから引き出され、遊星主と共にピサ・ソールに長距離転送されていた。

「このままピア・デケムの抜け殻と自殺などしてたまるか」

メインコンピュータルームに至ったJは、アルマは連れ去られたと判断。

自らも脱出すべく駆け出す。

その間にも、ピア・デケム・ピットの出力は上がり続け、異様な熱量に包まれている。

ピア・デケム・ピットを自爆させ、逃走。

それは、まさにピサ・ソールを爆発させた時と同じ手法だった。

「同じ手に二度もひっかかるとはな」

自嘲的にJは呟いた。

ピア・デケム・ピットはもうあと幾許もなく、動力炉の暴走により爆発するだろう。

Jを救ったのは、ペンチノンが発したESSミサイルによってである。弾頭を外したESSミサイルは、しばしば救出用に使われるのだが、この度も見事にJを助け出した。

「急いでここを離れるぞ！」

ゴッドジェイダーに回収された」は、爆発するピア・デケム・ピットから距離を取るよう指示した。
ジェイアークに戻り、高速で離れる。

ESウィンドウを展開し、短距離ワープでさらに足を稼ぐ。

そして。

ついに、ピア・デケム・ピットのジュエルジェネレーターは爆発した。

超新星爆発にも匹敵する光が、闇を白色に染め上げた。

その余波は空間を伝わって、遠くを飛んでいたジェイアークにも衝撃を与える。

これまで戦闘に預からなかった管理局の艦隊も、衝撃波に巻き込まれて出力ダウンを強いられていた。

「だけど、アベルはピア・デケム・ピットを失っても平気なの？」

「おそらくは、ピサ・ソールで複製させるつもりだろう」

ピサ・ソールを爆発させた時には、その複製を瞬時に作りだし自爆させたが、それはピサ・ソールが側にあったが故の計略だった。

今回、ピサ・ソールとピア・デケム・ピットは離れすぎていたためか、複製を作って爆発させるわけにはいかなかったのだが、「達に真相を確かめる術もない。

「これからどうする、」

「ピサ・ソールに向かう」

そこにアベルがいる。
はやくにも協力したほうがいいだろう。

「これが最後だ。次こそアルマを奪還し、アベルを倒す！」

「わかった」

フェイトは頷いて、アースラに通信を送った。

事の経緯を報告し、ピサ・ソールに向かうアースラ隊に合流する旨を伝える。

「ここから先はジェイアーク一隻のみで行く」

残りの艦隊はミッドチルダに引き返し、地上部隊を助けるように、と、告げた。

はつきりと足手まといとは言わなかったが、アベルとの戦いでは何ら活躍もできなかったので、指揮官達は敢えて異議を唱えなかった。内心、忸怩たる思いを胸に仕舞い、承服の言をジェイアークに伝えた。

「わかりました。執務官らの武運を祈ります」

敬礼し、分艦隊の航行艦は踵を返してミッドチルダに急進していった。

「我らも行くぞ！」

ジェイアークは加速し、最終決戦の舞台になるであろうピサ・ソールに向かって突き進んだ。

ふと。

この時フェイトは、なのはは エース・オブ・エースは大丈夫だろうかと、頭の片隅で思っていた。なのはははやてたちの前にも卑劣な罠が待っているのではないかと、心配になる。

「負けないで」

そう、親友の勝利を願うフェイトだった。

第二章 雷光の戦士（後書き）

凱やスバルたち、ミッドチルダに向かった勇者たち。
地上を破壊する遊星主との、激闘が開始される！

次回 第三章「新星部隊対遊星主」へ続く！

第三章 新星部隊対遊星主（前編）（前書き）

執筆遅れました

第三章 新星部隊対遊星主（前編）

次元の海。

遊星主を追って流星の如く加速する超人エヴォリューダーとGストーン・サイボーグ。

そして、緑の星のラティオ。

凱は魔法を使い飛翔するが、遊星主に追い越ることができたのは、アストロノーツ時代に習得した知識と技術のおかげであつたろう。

一方、ルネはもっぱら直感に頼つての飛行だ。

護の場合は、一年に渡り、三重連太陽系で遊星主と戦い続けた経験からか、追跡も手慣れたものである。とは言え、飛行速度は獅子王の二人よりは遅い。

彼らを振り切るかのように、ソール11遊星主はミッドチルダ目指し飛んでいく。

凱はデバイス《ガオーブレス》を起動。
直射型魔法を放つ。

「ブロウクンシューター！」

なのはのアクセルシューターを参考に編み出した砲撃であり、ブロウクンマグナムと同じ破壊力を持つ。さらに、複数に分裂して敵を撃つことも出来、ヴィータのシュワルベフリーベンに近い形態と言

えた。

自動追尾機能が設定してあるため、逃れるは困難だ。

「いけっ！」

光の弾丸は遊星主を背後から追い、そして、着弾した。

だが、遊星主に目立ったダメージは見えない。

むしろ爆発の衝撃を利用してさらなる加速を得ていた。

遊星主を乗せたパーツキューブが、一気に遠ざかる。

「しまった……！」

悔やむ凱。分裂したために威力が半減していたのか。

遊星主たちはぐんぐんと、ミッドチルダのある方向へと進んでいく。

凱とルネも負けじと加速を強めた。

「は、早い……！」

護は必死に凱たちに追い縋ろうとした。

そんな彼に、はやての命で地上防衛に向かった艦が接近してきた。

護は艦から、転送で地上に直接降下することを告げられ、同行を願った。

防衛部隊を指揮するシグナムは承知して、護を艦に収容した。部隊は、ミッドチルダの衛星にある転送ポートから、地上に降りる考えであった。

ミッドチルダ軌道上。

そこには、クロノ提督麾下の艦隊が連絡を受けて待ち構えていた。防御陣形を敷き、遊星主の進撃を阻止せんと、皆が緊張の面持ちで遊星主到来に備えている。

「来ました！」

「敵・遊星主……七体確認！」

「こちらに真つ直ぐ向かって来ます」

「よし、アルカンシエル、起動準備……」

管理局にすれば《勝利の鍵》に相当する、魔導砲起動に必要なキイを取り出して、クロノが艦隊に指示を与える。

魔導砲アルカンシエルはそもそも単体のみでも強力な武装だ。管理局の保有する兵器のなかでは最も破壊力を秘めたものといえよう。純粹なる破壊を行うアルカンシエルは、物質そのものを消滅させる。ある意味、管理局にとっては切り札でもある。滅多な事では使用されぬが、遊星主を倒すため即、許可が下りた。

「遊星主、間もなく射程に入ります！」

パーツキューブに乗った遊星主たちは、円陣を組むかのようなフォーメーションでクラウドディア艦隊に接近してきた。

「アルカンシエル、発射！」

まばゆい光が、艦から放出された。

空間の一点に束ねられた光が、遊星主を飲み込もうとする。

だが。

目前に迫るアルカンシエルの光にピルナスが婉然と微笑んだ。カインは無表情だ。他の遊星主感情のない顔立ちであるが、余裕のようなものが感じられた。

やがて、光が、彼らに直撃した。

「どうだ？」

ほぼ直撃だ。

普通なら、消滅は免れないはず……

「うっ！？」

クロノは目を疑った。

眼前の空間に、巨大な穴が出来ていた。

「これは……！？」

時を少し遡る。

アルカンシエルが放たれると同時に、一体の遊星主が前に進み出た。彼は右腕を突き出し、力を振るう。

力は、指向性のある重力波だ。アルカンシエルは空間の湾曲により、連鎖的に、百数十キロ内に存在する全てを反応消滅させる兵器である。その破壊の威力は、魔導の器であった《闇の書》の防衛プログラムですら消し去るほど。

それを遊星主　　ピーヴァータは、重力波で逆方向に空間湾曲を生させることで反応を弱めほぼ無力化させてしまった。その結果、GGGのデイバイディングドライバーを発動させた時の様な現象が発生した。

ガオガイガーのデイバイディングドライバーは、レプリシオンフィールド（反発力）とアレスティングフィールド（拘束力）を同時に励起させ、空間湾曲エネルギーにより見かけ上何も存在しない空間を作り出す。

この場合、擬似的なデイバイディングフィールドが遊星主と艦隊の中間に誕生したのであった。

そこを飛び越え、遊星主が攻勢を仕掛けて来る。

遊星主たちは高出力のソールウェーブを集中させて、艦隊に浴びさせた。

艦船が次々に攻撃を食らい、ダメージを負っていく。

「くっ
」

頼みの綱のアルカンシエルが効かないとなると……

「これでははやてがピサ・ソールを破壊する前に、地上が！」
防御陣が壊乱し、遊星主に突破されてしまう。

「だが。それでも……奴らを止めないと　　」

ソールウェーブの高熱で爆発する艦の装甲板を見ながら、クロノは歯を食いしばり、呻く様に言った。

数分後。

誰しもが不安と緊張を覚えながら待機していたミッドチルダ地上部隊に、緊急出動がかけられた。

クロノは焦りながらも、地上と連携を取って遊星主に対処する事を忘れない。

地上に自身の部下たち《宙》の魔導師を派遣し、応援させた。オーバースランク以上の魔導師がいれば、大規模な殲滅魔法で迎撃するのだが、この距離まで突破された以上、下手に大きな力は使えない。ミッドに被害をなるべく起こしたくはないのが彼の考えだ。

「ヴォルケンリッターや、なのはの教え子達も向かってきている。何とか、持ちこたえてくれ……」

ミッドチルダではすでに市民の避難は完了し、防衛に当たる勇者隊の部隊が遊星主を待ち構えていた。

ミッドチルダの大気圏内に入り込むや否や、遊星主たちはパーツキューブとフュージョンした。

普段はアベルと共にピア・デケム・ピットに居る事が多いピルナスも、巨大な戦闘口ボへと変化する。

フュージョンしないのはカインだけだ。彼の場合、真にフュージョンするのに値するのは、ギャレオンのみなのかもしれない。

パーツキューブに合体して遊星主たちは、ミッドチルダ各地へと散って行く。

破壊活動を開始する。

凱たちがミッドチルダにたどり着いた時には、すでに激しい攻防が

繰り広げられていた。

巨大ロボと化した遊星主を食い止めるべく、追ってきた凱たちが立ち向かう。

緑豊かな景勝の地に、凱と護が降り立つ。

山々に囲まれたそこは、フェイトが幼き日を過ごした地方だった。アルトセイムと呼ばれるそこに、遊星主・プラヌス、ペイ・ラ・カインが襲来していたのだ。プラヌスには凱が、カインには護がそれぞれ当たった。

一方、首都クラナガンでは、ポルタン、ピルナス、ペチュルオンが勇者隊と戦っていた。

また、ピーヴァータはベルカ自治領、ペルクリオは港湾地区に巨躯を降ろす。

ミッドチルダ各地は戦場となり、激闘が繰り広げられるのだった。

第三章 新星部隊対遊星主（前編）（後書き）

遊星主と戦う我らが勇者たち。

次回、第五章「新星部隊対遊星主（後編）」へ続く！

第四章 新星部隊対遊星主（後編）

ミッドチルダ南部。

遊星主プラヌスは長身瘦躯の姿の持ち主であった。

凱に対し、ビームとミサイルで攻撃をしてくる。

防御魔法でそれらを捌きながら、彼もまた攻撃を繰り返した。

「ブロウクン・ファントム！」

撃ち出された緑の光弾が、遊星主に肉迫する。

その軌道を見切ったプラヌスは、ブロウクンファントムを回避すると同時にミサイルを発射。誘導弾と接触し爆発。光弾が砕け散る。

「たやすく勝たせてはもらえんか……」

凱は闘志を奮い立たせた。

「行くぜ、ガオーブレス！」

獅子の顎が吠える様に、起動音をたてた。

凱はさらなる力を、腕に籠める。

「 勇気の赴くままに！！！」

首都クラナガン。高層ビルの屋上に二つの影が立っていた。管理局の誇る、エース・オブ・エースの技を継ぐもの達。短髪の少女スバルとツインテールの少女ティアナ。二人は遊星主の姿を求めて、辺りを見回した。下界を見下ろせば、街の様子は静かだ。市民は安全な区域に避難している為、視界に映る人々は皆管理局に属するものたちばかりであった。

「……………おかしい」

「あんなデカブツ、普通なら見失うはずなのに」

魔法の走査にも引つ掛からないなんて……………

「……………!?」

スバルの目の色が変わる。

「ティア、危ない!!」

「えっ……………!?」

とっさにティアナを突き飛ばし、スバルはシールドを発動。飛来した二刀を弾き返した。

「これは……………!?」

立ち上がりつつ、驚愕するティアナ。

「出てこい、遊星主」

スバルが叫ぶ。

すると、隣のビルに、空間から滲み出るように巨大な姿が現れた。ソール11遊星主の一体、ポルトンである。

鋭敏に感覚器官を強化されたスバルだからこそ、微かな投擲音に気付くことができた。

ティアナー人では、危ないところであった。

「姿を消せる遊星主、か……」

ティアナは対策を練って考え込んだ。

スバルは構えつつ、ポルトンの動きを計っている。

と、また、ポルトンの姿が消えた。

光学迷彩の一種であるが、魔法でも走査しにくい特殊なカモフラージュである。

しかし。

流石な遊星主といえど、動作音までは消せない。

人では気づかない静穏な動きでも、戦闘機人の強化された聴力なら

……

「そこだっ」

スバルのシールドが、ポルトンの刀を弾いた。

ティアナは、改めて戦闘機人の身体能力の高さに感嘆した。

「スバル！」

「こいつ、でかいくせに、凄く早い……しかもあの巨大な刀。当たればやばいね」

「あんたのISで太刀打ちできないの？」

「いや……」

新たに開眼したスバルの先天技能。

それなら或いは……

「来るっ！」

ポルトンは加速。二人に襲い掛かる。

すでに光学迷彩を解除していた遊星主が、二刀を手にビルを揺るがし踏み込む。

「くっ」

スバルとティアナは跳躍しながらの回避へ。

同時に、ティアナが撃つ。

複数の誘導弾を放つ《シュートバレット》の魔法だ。

四方からの攻撃に、ポルトンは独楽の様に回転して、誘導弾を風船を割る様に全て弾き碎いた。

「ちっ」

ティアナは舌打ち。

直後、その動きが一瞬静止するのに合わせ、スバルがポルトンの背後から攻めた。

「うおおっ」

至近距離からの《デイバインバスター》！
なのはから受け継いだ一撃必倒の技だ。

白き光が遊星主を打つ。
爆発。

スバルは効いてくれることを祈りつつ、間合いを開けようとする。

(！)

スバルが反応するよりも一段早く。神速で放たれた斬撃が、水平に流れた。横からの一刀はスバルを両断せんと疾る。

「スバル　！？」

遊星主・ピーヴァータの巨大なチェインソーアームが、高速でシグナムに叩きつけられる。

騎士はレヴァンティンで切断の力を受け止めた。

火花が散り、そのパワーの前に、さしものシグナムも押され気味となる。

「ぬう……」

汗が額を伝う。

カートリッジ二発分の魔力を消費し、チェインソーを『斬る』事を図ったが、逆にレヴァンティン自身に負荷がかかるばかりだ。このままでは、埒があかぬ。

刃をチェインソーからずらし、シグナムは展開したバリアでチェー

ンソーを受け流した。滑る様に体を移動させた彼女の横を、チエーンソーアームが轟音と共に振り降ろされる。すぐさま鋸の腹を蹴り跳んだ。空中高く離脱していく。

「カートリッジロード!!」

《explosion!!》

シュランゲフォルム。

シグナムは中・近距離攻撃を放とうとした。

そこへ

「うっ!？」

パイルドライバーから、ピーヴァータの攻撃が繰り出される。それは、アルカンシエルを打ち破った、重力波攻撃だ。

「くおおおっ……!!」

重力衝撃波はシグナムを直撃した。重力波フィールドで歪めた空間の復元力を利用した衝撃波には、距離による減衰は無かった。結界を張って防いでいるが、守護騎士中、最も防御力が低いシグナムには苦しい防戦である。

「く……」

もし結界が破壊されれば、高重力に押し潰されるのだろうか。

「この衝撃波ごと、斬り裂ける力が……あれば」

だが、今は衝撃波から身を護るので精一杯だ。

「はっ……!!」

不意に、衝撃波の圧力が消失した。と、思った瞬間。シグナムの正面に巨体が舞っていた。

ピーヴァータはチェインソーでシグナムを打撃する。

「うわあああつ　　!!」

吹っ飛ばされ。

シグナムは大地に叩きつけられた。

海上。

火竜と騎士達を阻む見えざる波が、鳴り響いていた。

ペルクリオは『音』を武器とする遊星主である。

超音波振動によって、目標となる対象を破壊するのがその能力だ。原理的には、GGGのマイク13のソリタリーウェーブと同根であり、また、ソムニウム戦闘形態ベターマン・ネブラの必殺技「サイコ・ヴォイス」も同じ効果があった。むしろ、ネブラの能力を元にGGGが開発したのがソリタリーウェーブと言えよう。

ペルクリオには専用オプションとして、ブルブルーが付いている。ブルブルーはペルクリオの『音』を増幅する、鯨形の巨大遊星主であった。

その『演奏』に、キャラが結界のフィールドで必死に耐え続けている。

「頑張つて、キャラ！」

赤毛の少年、エリオは槍型のデバイス《ストラダ》を手に、歯痒い感情を抱いていた。

フリードリヒの背に立ち、構えているものの、彼にはペルクリオの『音』に対抗する攻撃技が思いつかないでいる。

フリードの火炎も、酸素原子を粉碎される事で無効化された。接近戦に持ち込むにも、ペルクリオのソリタリーウェーブが有る限りそれも難しい。

『だけど、このままじゃ……』

ケリユケイオンに最大限の魔力を注ぎ込み、ひたすら結界の維持に集中するキャラの表情に、疲労の色が浮かびはじめた。

『指をくわえて見てるだけなんて』

ギリ、と奥歯を噛む。

一方、キャラはソリタリーウェーブから仲間を守りながら、アルザスの守護竜・ヴォルテールを召喚する方途を考えていた。だが。いかにヴォルテールといえど、遊星主に勝てるのか彼女には自信がない。

だが、それでも

(エリオ君やフリードを……!)

その時。硝子が割れる様な、乾いた音が響いた。

(えっ …!?)

「まさか……」

「アギヤ!？」

結界が、砕けた。

「魔法を……超音波振動で分解した!？」

驚愕している余裕は無かった。ソリタリーウェーブがエリオたちに襲い掛かってきた。

「うわあっ!！」

「きゃあっ……ケリュケイオン!」

凄まじい痛みにさらされながら、キャラは無理を承知でデバイスに願う。

「みんなを守る……力を!」

直後、複数の水しぶきが巻き上がった。

ミッドチルダ西部・エルセア地方。そこは山や林に囲まれた景勝の地であったが、いま、ここを局地的な暴風雨が荒れ狂っていた。遊星主・ペチュルオンが起こした電磁竜巻のせいである。

吹き荒れる風の中、ヴィータは無言でペチュルオンの巨体を見上げていた。その視線は冷徹で、鋭い。

電磁竜巻は、遊星主の腕にある巨大な電磁石とスクリューを高速で回転させて生み出しているようだった。

将であるシグナムよりも防御に優れたヴィータは、魔法で完全に電磁竜巻の影響を防いでいる。

ならば。ここは、攻勢に出るのみだ。

「ぶち抜く」

くろがねの伯爵グラーフアイゼンが主に応えるように、カートリッジを排夾する。

「いくぞ、アイゼン！」

《Jawohl!!》

跳ぶ。

「一気に……真上に!!」

加速。飛翔したヴィータは、電磁竜巻の上に。

空中から暴風雨の中心、「台風の目」に当たるぽっかり穴の開いた空間を見た。そこに発生源たる遊星主がいるのだ。

頭上から、攻撃を加えれば、電磁竜巻もガードの意を為さないはず。

「はあっ！」

複数の鉄球をハンマーヘッドで撃ち出す、ヴィータの必殺技が放たれる。

大気を突き破る音が鳴り。

赤い魔力光の尾を引いて、鉄球が飛ぶ。

ペチュルオンの無防備な頭へと向かう。

「うっ……！？」

だが。

遊星主は腕の向きを変える。

竜巻が、上空にいたヴィータに向かって牙を剥いてきた。

顎を開いた竜の様に、獰猛な渦がヴィータを飲まんとする。

鉄球は電磁竜巻により、威力を削がれ、イオンパルスの衝撃をも食らって破碎された。

「うあああっ！」

ほとんど音速に近い速度で、嵐の竜が襲い来る。深紅の騎士は電磁竜巻によって動きを封じられ、稲光が舞う激しい渦に翻弄された。

「ぐあっ……！？」

やがて、竜巻の顎から吐き出されたヴィータは、凄まじい勢いで地面に投げ出された。

ぬかるみが騎士服を汚した。
グラーファイゼンに縋り付きながら、ヴィータが立ち上がる。

「畜生……てめえ」

その瞳に燃える闘志は衰えるどころか、逆に熱量を上げたようだった。

「今度はその電磁竜巻ごと、てめえをぶっ潰してやる」

グラーファイゼンをカートリッジ・ロード。

「なのはの為にも、てめえは必ず倒す!!」

ミッドチルダ東部、かつてスカリエツティのアジトが存在した山嶺が見はるかす一帯。

緩急のある丘陵が連なっている地帯があり、その上空を飛ぶ人影があった。

ジグザグとした不規則な飛行は遊星主ピルナスであり、それを追って空を翔けるのはルネ・カーデーフ・獅子王である。

針や鞭、火炎がピルナスの攻撃であり、ルネは魔力を帯びた拳と蹴りが武器だ。

だが、機動力に優れたピルナスに打撃を当てるのは難しい。

魔法の砲撃を撃つみたが、直線的なビームでは簡単に回避されてしまう。

飛行魔法に未だ慣れぬことも、ルネが焦る一因である。

(くっ……ちょこまかと)

微笑しながら鞭を振るうピルナスに、ルネは苛立った。

さらじ。

「ふふふ……子猫ちゃん、貴女との追いかけてこも飽きてきたし、そろそろ本気でぶち殺してあげるわ」

「なんだと!」

怒るルネの前で、ピルナスが叫ぶ。

それは融合の合図。

「フュージョン!」

パーツキューブを召喚、一体化していく。

「うっ、これはパルパレーパ達と同じ……」

巨大ロボットとなったピルナスは、右腕から針を発射した。

一本だけではない。数百に及ぶ巨針の弾幕である。

ルネはプロテクションを展開して防ぐが、ピルナスが次に繰り出す鋼鉄の鞭により、弾き飛ばされてしまった。

「ぐおおっ」

丘の斜面にサイボーグボディーがめり込んだ。

「うっっ……」

たたき付けるように、ピルナスは炎熱の帯を放つ。
赤い光が周囲を照らし。

爆発が起こった。

豊かな自然が色づくアルトセイム地方。
そこに、大きな窪地があった。その窪地の底に対峙する大小の姿がある。

ペイ・ラ・カインと天海護だ。カインは無表情で立ち、護は決意を秘めた瞳で遊星主を見返している。

二人は知らなかった。

かつて、この地はフェイトが幼少を過ごした思い出の土地だということ。プレシア・テストロッサが真実の母だと信じ、魔導師となる訓練に一生懸命だった時代の記憶が染み付いた土地だということ。

窪地にはその居城たる「時の庭園」がそびえ、フェイトとアルフが成長した場所である。だが、それも、時空の彼方に於いて崩壊し消え去った。フェイトの母と姉を道連れに……

フェイトの思い出と、そして哀しみを遺したこの場所で。

緑の星の守護神と、そのオリジンの息子に生まれた少年がぶつかり合う。

「ラティオよ……」

厳めしく語りかけてきたペイ・ラ・カイン。

「本当に父である私と戦うつもりか？」

問い掛けと共に、彼の額から光が灯る。

逆転したGの紋章。

遊星主の力の源、ラウドGストーンの輝きだ。

「故郷である三重連太陽系を見捨て、下等な世界をそなたが救うというのか？」

「黙れ！」

あの、温厚な護が珍しく、語気荒く声をたたきつけた。

「あなたは僕のお父さんじゃない！」

そうだ……目の前の男は真の父ではない。アベルがオリジンのカインの人格を抽出して創りあげた操り人形だ。

アベルの命令に従い、プログラムの通りに行動する人形……。

「プログラムにすぎないあなたが……カインを騙るな！」

護は凱からカインについて、どれだけ高潔な人物であったか、聞かされていた。生前ついに見えること叶わなかった、父について。

（カインは……地球を滅ぼすより地球と共存しようとした。次元世界を滅ぼしてまで三重連太陽系を再生させようとする遊星主とは違

う！)

それは、Gクリスタルの「マザー」から聞かされた事実だった。

滅亡が近づく三重連太陽系において、赤の星はギャレオリア彗星

次元ゲートの彼方の宇宙から暗黒物質を取り寄せ、宇宙の収縮を止めようとしていた。三重連太陽系は生きながらえることができるかわりに、暗黒物質を持ち出された宇宙は、滅亡を速めてしまう。GGGが遊星主と戦う理由はこれに起因する。

三重連太陽系の復活を求めれば、結果的に別の宇宙の消滅に繋がるのだ。

一方、緑の星は全く逆の考えを持っていた。

カインは滅びゆく三重連太陽系から、次元ゲートの彼方の宇宙に移住する道を選択していたのだ。

先住民と共存し、三重連太陽系の文化を継承していく……

だが、アベルやカインの計画も、紫の星で開発されたZマスターシステムにより瓦解する。

暴走したZマスターは三重連太陽系を機界昇華に導き、滅ぼした。

そして次に、次元ゲートの彼方へと侵攻し地球の機界昇華を狙った。それから、ガオガイガーと共に戦った護の記憶に新しいところだ。

「ふっ……そこまでこの世界に肩入れするのならラティオよ。そなたが仲間と呼ぶ者達共々、討ち滅ぼしてやるっ」

カインはいきなり、ラウドGストーンの衝撃波を放った！

「くうっ」

ズン、と防御する護の体に、重たい衝撃が伝わる。

「創造神に逆らう罰を食らうがよい」

アベル……彼にいくら僕を動揺させるために喋らせても……僕の勇気は砕けないよ！

『勇気さえあればGストーンは必ず俺達に力を与えてくれる』

……それが勇気ある誓い。

「だから、負けない。ペイ・ラ・カイン」

護の額にGストーンの紋章が浮かんだ。真逆ではない、正しく、真の勇気ある者の証たる紋章が。

「勇気があればきつと、GストーンはラウドGストーンを凌駕する
！！」

「ラティオオオオ！！」

カインは破壊の力を解放する。それを護は防御の力で受け止める。

このパワーに耐え切れるか、ラティオよ！？

「うおおおおっ！」

ほとばしる緑の輝き。

護の力が、カインの力を押しつけていく。

「ぬ？」

人形であるはずのカインの瞳に、驚愕が走った気がした。

「はあっ！」

護はついに、カインの力を押し返した。

「ぐあっ」

カインは跳ね返ってきた己の力によって、吹き飛ばされる。

「ラテイオっ」

だが、まだ致命的なダメージを与えたわけではない。

カインは護に容赦ない攻撃を仕掛けようとした。

「碎けるがいい……ラテイオよ」

「あなたには、絶対に勝つ！」

本当の僕のお父さんのためにも

！！」

地上で戦いが繰り広げられている頃。

アースラもまた、ピサ・ソールへ向けて着々と進んでいた。

だが。

進路の先には、妨害が待ち構えていた。

「よくここまで来たな……時空管理局の者達よ」

自らを神を宣する遊星主、パルパレーパはアースラの艦首に、その
傲岸なる笑みを見せるのだった。

第四章 新星部隊対遊星主（後編）（後書き）

ピサ・ソールへの道を阻む遊星主の企み。
再び敵として現れた娘に、なのはは

次回 第五章 母と娘 破壊神を喚ぶものたち！！ に続く！

第五章 母と娘 破壊神を喚ぶものたち!!

闇のなか、金の髪の色がよく目立った。

(なんで)

胸中、八神はやては嘆息する。

(あともう少しで着くっちゅうのに……)

ピサ・ソールまであと一息という所でアースラは、パルパレーパの妨害に遭った。

立ちほだかる遊星主は無防備な様子で浮かんでいる。

「生憎だが、いまピサ・ソールに近づいてもらうわけにはいかん…
…この場に一人残らず沈むのが貴様たちの運命」

「どんな運命やねん……?」

「神が定めし運命だ」

パルパレーパは冷笑を口端に刻みながら、軽く腕を上げる。

「……フュージョンするんか!？」

パルパレーパはパーツキューブとケミカルフュージョンすることにより、巨大ロボ・パルパレーパプラスとなるのだ。

「貴様らの相手は私ではない。さあ、出てくるがよい……聖王の器よ」

忽然と現れた少女。

長い金髪に、左右色違いの瞳。いにしえの聖王の遺伝子から誕生した、古代ベルカの遺産を継ぐもの。

「ヴィヴィオ!」

聖王の少女は無表情に構えた。ベルカ式の格闘技、シューティングアーツの構えだ。

「さあヴィヴィオ、戦え。貴様を狙う敵と、な」

「あいつ、ええ加減なことぬかしよるわ!」

「……やはり、ケミカルボルトに操られてるんでしょうか?」

ルキノがはやてに訊いた。

「おそらく……護くんが言うには、連中の常套手段らしいわ」

硬い表情ではやてはなのはに視線を移す。

なのははモニターに映るヴィヴィオの顔を凝視している。

「レリックがヴィヴィオの力の源やけど、ゆりかこの内部じゃなければ、聖王の本来の力は発揮できないはず」

あくまで推測にすぎない。

だが、その存在そのものが動揺を誘うものではある。

パルパレーパはヴィヴィオを出すことでこちらの攻撃をためらわせ、戦意を削ぐのが目的に違いない。

「なのはちゃん……」

「部隊長。私に出撃許可を」

「ほんまに、ええんやな？」

確認する様に、はやてが問うた。

「はい」

なのはの瞳に不動の意思が宿っていた。

聖王のゆりかごに挑んだ時、すでに決めていた覚悟。

ヴィヴィオを救う。そのためならば、どんなものとも戦う。たとえそれがヴィヴィオだとしても。

「次元の海の中で戦えるのは、私だけです」

「よし……わかった」

もはや、親友の新しい力に頼るしかない。はやては心に決めた。

「高町なのは隊長の出撃を承認や！」

「レイジングハート!!」

勇躍してなのははレイジングハート・ジェネシスを起動。

《Fusion Mode》

ヴィヴィオもなのはも特殊な防御フィールドを防護服の周囲に展開することで、次元の海で生じる生体への影響から自身を守っていた。

「ふふふ……そつだ。戦うがいい」

パルパレーパは距離を開けて、二人の戦闘を見守っている。
アースラのクルーも、母と娘の戦いに固唾を飲む。

「いくよ、レイジングハート」

なのははいきなり砲撃で攻撃しようとする。
が。

ヴィヴィオは神速で間合いを詰め、なのはに近接技を仕掛けてくる。

「く……速い!？」

「たあああつ!!」

魔力を乗せた拳が急所を襲う。だが、そこはスバルを育てたなのは

だ。

砲撃魔導師ではあるが、近接戦闘の心得もある。戦技教導官時代の経験がものを言った。

ヴィヴィオの攻撃は速く的確。しかも当たれば大きい。それを、最小の動作で回避し、受け流す。

「っ……………!!」

焦るヴィヴィオ。

一方、なのはは笑みさえ浮かべている。

(どうして笑うの……………?)

「ヴィヴィオ」

優しい声がした。

(ママ)

「いま、ママが助けてあげるからね」

(無理よ!!…)

心の叫びは悲痛だった。

(ケミカルボルトがある限り、私は)

「だから、ヴィヴィオも闘って。遊星主の呪縛と」

「できないよ!!…」

泣きそうな声が、ほとばしった。

パルパレーパのケミカルボルトは対象の身体を支配し、自在に操る。レプリジン・護や凱ですらその命令に逆らえずに、仲間と戦わざるを得なかったのだ。ゆりかご崩壊後、ヴィヴィオにかけられたクアットロの暗示は解けていたが、肉体を支配するケミカルボルトの威力は振りほどけそうにない。

パルパレーパに命ぜられるまま、ヴィヴィオの身体は一度は母と慕った女性を攻撃する。

「大丈夫、ヴィヴィオは強い子だから」

「マ……マ……」

「世迷い言を」

パルパレーパは吐き捨てるように呟いた。

「あの、エヴォリユダーがケミカルボルトの影響を免れたのはラテイオがいたからだが……しかし、今、奴はいない。私のケミカルボルトからの解放など不可能と知れ」

「ああああっ!!」

虹色の魔力光カイゼル・ファルベが、遊星主の命令に苦しむヴィヴィオを照らし出す。

「ごめんなさい……」

ヴィヴィオはなのはに砲撃を撃ち込む。
幼子の時になのはから収集した魔法。至近距離から放つ《インパクトキヤノン》だ。それを、プロテクションで防ぎつつ、なのはも砲撃を使う。

「!」

《ショートバスター》の直撃は、しかし、強固な《聖王の鎧》によつて軽度のダメージしか与えられない。

なのはの最大の持ち味は収束砲だが、機動力に優れたヴィヴィオが相手ではチャージが難しい。
ならば。

「チェーンバインド!」

拘束魔法でヴィヴィオを止めるしかないだろう。

「……しまっ」

手足を拘束され、ヴィヴィオは顔色を変える。

「ヴィヴィオ、痛いけど我慢してね」

すでに魔力の収束を開始していたなのはは、ヴィヴィオに微笑みかけた。

「ダメだよ、ママ」

ヴィヴィオは四肢に魔力を籠める。

雷光がまばゆく輝いた。

フェイトから収集した格闘戦用魔法である。

フラスマーム

「はぁあっ!」

チエーンバインドの拘束を雷の魔力刃で切断、自由を得たヴィヴィオは跳びすさりながら増援を呼ぶ。

「フロントムガオー!!!」

「な……!?!」

一機の戦闘機が闇を裂いて出現した。

「ガジェット……? いや違う。あれは」

それは、紛れもなき地球産の機体。GGGが造りあげた勇者王のコアマシン、ギャレオンに替わるべくして開発されたフロントムガオーであった。

しかし、よく見ればその色合いが微妙に異なる事が見てとれるだろう。

第一、フロントムガオーはガオファイガー共々三重連太陽系において、ピア・デケム・ピットに押し潰されたはず……

そう。遊星主は再び、ピサ・ソールに保存されたデータを基にレプリジンを作り上げたのであった。

今回は凱の代わりに、ヴィヴィオが操縦者に使われたのだ

ハッチが開き、ヴィヴィオを迎え入れるフロントムガオー。

「フュージョン……!!」

その姿が揺らいで消える。ファントムカモフラージュによる光学迷彩である。それは変型への合図。

同時、なのはも行動を起こしている。

「ギャレオン……!!」

今一度、あなたの力を貸して!

アースラから飛び出した鋼鉄の獅子が、なのはに向かう。

「フュージョン……!!」

口蓋内部に收容されなのはが、ギャレオンと一体化する。

そして。光学迷彩が解かれ、白き巨人が登場した。
ファントムガオーから人型へ

「ガオファー……!!」

「ガイガー……!!」

よく似た巨人が相対する。その足元には魔法陣が輝いていた。

魔力展開。GSライド・レリックコアとの結合完了。

虹色の光がガオファーから放たれる。
魔法によって、変換された姿。セイクリッド・ガオファー。
ポテンシャルにおいてガイガーを越えると言われたガオファーだが、
聖王の鎧や魔法によりさらに強力と化していた。

一方、ジエネシック・ガイガーも変化を開始していた。
魔法による変換で、桜色の翼もつ天使の様な姿へ。
なのはの魔法と勇気が合わさり誕生する、スター・ガイガーだ。

メカノイド同士は変型を完了させ

セイクリッド・ガオファーとスター・ガイガーが戦いを始める。

「フアントムクロー！」

先に仕掛けたのはヴィヴィオのほうだった。
先程のお返しとばかりに、武装のクローで攻撃する。

「ジエネシッククロー！！」

対するなのはもクローを装備し、ヴィヴィオの攻撃を受け止めた。
スピードや威力は双方変わらず、フュージョンしたことで互角の格

闘戦能力が身についている。

しばしの間、クローによる打ち合いが続いた。

ヴィヴィオは不意に魔法陣を展開、拳をガイガーに叩きつけるように突き出し

「セイクリッドクラスター!!!」

放たれた魔力弾が爆散し、小型弾殻をなのはに向かってばらまく。小型弾殻一つ一つは強力な破壊力を持っている。

「ストレイトバスター!」

なのはが撃った反応炸裂魔力弾が、セイクリッドクラスターを相殺して爆発する光の連鎖が周囲を彩った。

埒があかぬ、な……

パルパレーパは眼を細め、舌打ちする。

「聖王ヴィヴィオよ、真の力を解放するのだ! でなければその『敵』は倒せん」

(……真の、力?)

なのはが怪訝そうにガオファーを見た。ヴィヴィオは頷くように頭を動かした。

「わかった」

……ママ、いくよ。私の全力全開を

「ヴィヴィオ！」

なのはは、あることに思い至った。

ガオファーが複製されているという事は……当然あれも

その推測を裏付ける様に、ヴィヴィオが叫びを發した。

「ガオーマシンー!!」

遙かな声が空間を貫き、ガオファーのサポートマシンを呼び寄せるのだった。

第五章 母と娘 破壊神を喚ぶものたち!! (後書き)

ついに解き放たれた、究極の破壊神!

カインの遺産は高町なのはにいかなる力をもたらすのか……
そして、ヴィヴィオは!?

次回 第六章 悪魔王誕生!!! に続く!!!

第六章 悪魔王誕生！！！！

西暦2006年。

GGGはギャレオンの不在に際し、それに代わるメカノイドの開発に着手した。それが、ファントムガオーノガオファーである。

そして、勇者王に合体するガオーマシンも新たに開発されることになった。

新型ガオーマシンは宇宙での活動も視野に入れた高性能のマシンとして、エヴォリユダー凱をサポートするのだ。

ガオファイガープロジェクトはハードウェアに関しては順調に進んだが、問題はファイナルフュージョンに必要な新しいプログラムが正確に作動しないことである。しかし。バイオネットにより遺伝子操作を受けて誕生した天才少女・アルエットの能力により、FFプログラムは無事に完成した。

その年の末。バイオネットが新型ガオーマシンとガオファー、さらに卯都木命の身柄を奪うという事件が起こった。

必死の探索の結果、翌年1月、香港の決戦において凱は強奪されたガオファーとガオーマシンを取り戻す。命を救出するためバイオネットの要塞に突入した凱はアルエットの協力を得て、ガオファイガーに初フュージョンする。

ライバルだった鱈淵シュウの最後を見届けた凱は、バイオネットへの怒りとともに、ファイナルフュージョンを敢行、初めての合体を

成功させた。

ガオガイガー同様、フュージョンの成功は極めて難しいとアルエツトは指摘したが、凱は勇気で困難を乗り越えたのだ。

新たな勇者王は一撃のもとにバイオネットの浮遊要塞を撃破。命とアルエツトは悪魔の手から解放される。しかし、アルエツトはギムレットの攻撃を受けた影響で、凱たちの記憶と、天才的な能力を失い、普通の少女に戻っていたのだった

ガオファアの周囲を飛び回る新型ガオーマシンたち。

スペースシャトルに酷似した蒼き噴進機・ライナーガオーエエ、漆黒の翼もつ全翼型飛行機ステルスガオーエエエ、二連のドリルを備えた突撃重戦車ドリルガオーエエ……レプリジンとして甦ったガオーマシンは、セイクリッド・ガオファアを守るかのように飛び交っていた。

「いくよ……」

ヴィヴィオはファントムチューブを機体より放つ。それは、ファイナルフュージョンに必要なガオーマシンのガイドシステムである。

新型ガオーマシンが呼び出されたのを見たはやては、素早く後続艦に命じる。

「こつちもジエネシクマシンを！」

なのはからも同様の要請が届き、即座に艦のハッチが開かれる。

「 ジェネシックマシン解放！」

獣を模した五つのマシンが各艦艇から飛び出す。

孟き黒鳥・ガジェットガオー、巨爪を備えし土竜・ストレイトガオー&スパイラルガオー、滑るように宙を行く鮫と海豚・ブロウクンガオー&プロテクトガオー……緑の星で生まれたガオーマシンの原型たち。

スター・ガイガーを中心に、フォーメーションを組んで飛ぶ。待ち望むのは合体の刻。

「いこう、レイジングハート!!」

《Yes , My Master》

「ファイナル……フュージョン!!」

なのはが高らかに叫んだ。

同時に、ジェネシックマシンたちが所定の軌道に乗る。

そして、スター・ガイガーから竜巻が巻き起こった。

それこそ、最終合体の合図だ。

ヴィヴィオもまた、ファイナルフュージョンに移行中であつた。

ガオファアの周囲を、光の帯が半球形に巡つた。

これは、ガオガイガーのEMトルネードに代わる、ファントムチューブである。物理的な防御力ではEMトルネードに劣るが、電子的・情報的な遮蔽性は向上している。その、ファントムチューブにガオーマシン達が入入した。ヴィヴィオはすかさず、ファイナルフュージョンの新機構、プログラムリングを投射する。

ファントムリングはガオーマシンの制御プログラムの総称だが、ファイナルフュージョン制御プログラムと軌道安定ガイドとを光学的に形成したものだつた。これにより、ガオーマシンへの負荷を減らし、より確実なファイナルフュージョンが可能となつたのである。

それにしても……

本来、ファイナルフュージョンには第三者の操作が不可欠である。ガオファイガーの場合はFF承認とプログラムドライブの起動が、ジェネシック・ガオガイガーはGクリスタルのコンソールからジェネシックドライブを起動させねば、合体に移れない。強大な力を使用するために必要な一種のセーフティーにあたるのだが、なのはもヴィヴィオも己だけでファイナルフュージョンを行っている。

何故か。

簡単である。

ガオファイガーを複製する際、アベルはプログラムを改変した。ソルダートとジェイアークを創造した彼女にとって、地球人の開発したプログラムを変えることなどたやすい事だったに違いない。承認を必要としない、搭乗者自身の意思で（最も、凱の時は強制的に行わせたのだが）フュージョン出来るように作り替えた。

対して、ガオガイガーはレイジングハートがギャレオンの了承を得て、ファイナルフュージョン・プログラムを書き換えたのである。もともと、なのは達の使う魔法はコンピューターのプログラムに近いため、言語同士の親和性も高い。また、フュージョン後もなのはが魔法を発動できるよう、レイジングハートが独自に式を組み立てた。そうすることで魔導師の高いポテンシャルを活かせることができるのだ。

「両機、フュージョンをはじめました！」

いよいよ、二つの機体の変形を開始し出す。

「これが……ファイナルフュージョン」

はやては息を呑んで見つめた。

「ふつ。貴様、愛児に対し本気でその力を振るうつもりか？ 破壊神の力も辞さぬのではもやは母親でもない。高町なのは、貴様もはや《悪魔》と呼ぶ存在よ！」

「……悪魔でもいい」

かつてヴィータにも告げた言葉をなのはは呟いた。

「ヴィヴィオを救い守れるのなら、どんな力も受け入れる!!」

「くくつ、破壊するのみの力で以ってなにを救う？ 自らの手で娘の命を断つか……それもよからう」

パルパレーパは嘲笑した。

「それとも、我が娘に殺されるか」

彼はガオファーに視線を向ける。ケミカルボルトにより、ヴィヴィオはいやがおうにもなのはと戦わざるを得なかった。如何に葛藤しようと、ファイティングメカノイドの力を使わなければならぬのだ。かつて愛した、いや今も愛する母親へと

「私は管理局と共に傍観に徹させて貰おうか……」

パルパレーパが介入すれば、はやて達にはひとたまりもないだろう。だが、彼は嗜虐心から母娘同士の戦いを愉しむことに決めたのだ。

（負けない……必ずヴィヴィオを救ってみせる!!）

燃え上がるなのはの心。

（ママ……）

ヴィヴィオは痛みに泣きながら、ファイナルフュージョンを行った。

「ごめんなさい……」

ガイガー／ガオファアの両腕が背面に移動し、固定される。

ドリルガオーイエィがガオファアの脚に連結、ガツチリと接合した。

土竜の姿をした、スパイラルガオーが右脚に、ストレイトガオーが左脚にそれぞれ合体していく。

パシユツ……廃棄音をたて姿勢制御バーニアが離脱し、ライナーガオーイエィが連結フェーズに移行。ガオファアの胴体を貫通し両肩を形作る。

プロテクトガオーとブロークンガオーはバクンと割れて変形し、ガイガーの腕部口に突入。内部で連結合体して左右の肩を構成した。ステルスガオーイエィがガオファアの背後から覆い尽くす。

黒鳥ガジェットガオーは逆さまになってガイガーの後背部に取り付き、前脚を肩部にたて、我が身を固定するのだった。

そして、ガジェットガオーから上腕部が展開し接合される。回転しながら鋭い爪を備えた手が表れる。

ガイガーもライナーガオーイエィからせり出した上腕部と下腕部を火花を散らして合体させ、逞しい両拳を完成させた。

頭部を保護する冑とフェイスガードが顔を覆う。ジエネシクは髪にも見えるエネルギーアキュメーターを生み出した。なのはの魔力光の色をしたそれは燃料電池、いわばベルカ式のカートリッジのような役割を果たす。

正常に合体を終わらせたガオファイガーの内部のメカニクが、目覚ましく動き出した。排熱が微かな蒸気として漂う。

ガオガイガーの背面部、ガジェットガオの、長大な尾の様な頸部がゆるやかに身をくねらした。

互いの魔力光を含ませ緑の光を輝かせるメカノイドたち。

「ガオファイガー!!」

「ガオガイガー!!」

《Fusionsystem・Complete》

だが、まだ変化は終わらない。さらなるパワーアップを両者は図った。

「レイジングハート、魔力変換！」

《Standby Lady》

ガオガイガーの足元で魔法陣が展開する。ギャレオンの頭部を除いた各機関が魔力を受けて変形していく。

「ガジェットツール！」

ガジェットガオの頸部が分解し、瞬時にガオガイガーの左手と融合・合身する。

本来は形態を組み替えることで様々なツールに換わる機構だ。その、パーツがツールのひとつボルディングドライバーに似た形状へと組み上がっていく。

これこそ、なのはがフュージョンしたガオガイガーの超巨大デバイス　ギガンティスハートである！！

《All Complete》

魔導師の杖、というよりかは長槍のような形態である。

「レイジングハート、ガジェットフェザーを」

ガジェットガオ一部から八枚の羽根が展開した。さらにそれは魔力変換により、高機動に優れた翼へと変わる。

「アクセルフェザー！！」

桜色の翼を拡げ、変化したジェネシック・ガオガイガーが咆哮した。

「ナノツ……ガイッ……ガー！！！」

究極なる破壊の力……受け継げられし遺産……そのすべてを越えて誕生した、勇者王進化形態。

あらゆる存在を無に還す悪魔の王　即ち、NANOHA FUSION GAOGAIGAR……ナノガイガーである。

その威容に誰もが目を見瞠らずにはいられなかった。

「……忌まわしき悪魔め」

パルパレーパの片眉がしかめられた。

「だが、聖王の娘もまた貴様と同じく魔力変換により強大な姿を手に入れている。思い上がるのもそれまでだ……」

ヴィヴィオのフュージョンしたガオフアイガーも、進化形態になっている。

全長31.5メートルの巨体を虹色の光が包み込み、聖王の鎧を構成する。形状もより重厚に変型し、背にはステルスガオーIEIEIが変化した二枚の大翼が羽ばたいた。

「エヴォリアルウルテクエンジン、出力80%……さらに上昇！」

EI-01を倒した弾丸Xを参考にした、Gストーンのパワーを限界まで放出するシステム。それを凱の意思でコントロールできるようにした機能がガオフアイガーのエヴォリアルウルテクエンジンである。

瞬間的な出力はガオガイガーを遥かに凌ぐが、長時間のエネルギー解放はGストーンの機能維持すら危うくする両刃の剣でもあった。しかし、ヴィヴィオはそれに構わず出力を上げ続ける。なのはに勝つには生半可なパワーでは足りないからだ。共に暮らしてみて、そのことは十分に熟知しているヴィヴィオだった。

「……ヴィオツファイッガー!!」

VIVIO FUSION GAOF AIGAR……即ちヴィオフアイガーがここに顕現した。

ナノガイガーは頭ひとつ分、ヴィオフアイガーよりも抜きん出ている。だが、大きさが違っていても、油断はならない。

ヴィオフアイガーが秘めた力を、まだなのはは知らないからだ。

「ヴィヴィオまで……」

その巨軀を見たアースラのクルー達は、これから始まるであろう戦いに不安を隠しきれずにいた。

だが、はやるだけは親友の勝利を信じている。

(……なのはちゃん、頼んだで)

「「ブロウケン……」」

ヴィオファイガーが非実体型のフロントムリングを右手に発生させた。そして、ナノガイガーは既に発射モーションに入っている。

「フロント ムツ!!」

「マグナムツ!!」

双方に撃ち込まれる拳は、両者の中間地点でぶつかり合い拮抗した。激突の余波で見えざる衝撃波がアースラの方にまで押し寄せる。

「っ!!」

相手に届かぬ拳を戻し、ナノガイガーが急進。ヴィオファイガーに肉薄し、蹴りを放つ。

「く」

ヴィヴィオは腕でキックを受け止めた。スパイラルドリルがヴィオファイガーの装甲を削る。

(くっ　近接戦闘は私の方が上のはず)

魔力がヴィオファイガーの腕に宿る。

ヴィヴィオは猛然と反撃を開始した。ベルカ式の魔力付与は攻撃の威力を数倍に上げる。

「たあぁっ!!」

「さすが、技のキレが良いわね……でも」

なのはは余裕でそれらの打撃を防いでいた。

「私を倒すには力が足りないよ」

「わかってる……ママと戦うには……全開の……フルパワーが必要だって」

ヴィヴィオはエヴォリユアルウルテクエンジンの出力を限界まで引き上げた。

機体の一部が負荷に悲鳴をあげるが、ヴィヴィオは無視する。

(砲撃こそ、なのはママに対する最大の敬意　)

ヴィオファイガーは数多の光球を生み出した。

「これは　なのはちゃんの……!!」

アクセルシューター。なのはが得意とする、誘導操作弾。はやてはヴィヴィオがなのはとフェイトの魔法をかなりコピーしているという事に思い至った。

「八神隊長……あの誘導弾、大きさが」

「でかい、な……」

アクセルシューターの大きさは人間がすっぱり入ってしまう程、巨大だ。

それが数百と浮かぶ光景は、美しくもあり、また恐ろしくもあった。

「シュート!!」

光球が一齐にナノガイガーに向かう。

ナノガイガーは移動を図るが、全方位からの攻撃により着弾は必至。少しくらいのダメージは与えられる、とヴィヴィオは踏んでいた。動きを止めれば、一瞬の勝機がそこに生まれるはず。

ヴィヴィオは新たな砲撃のチャージをはじめた。光が伸ばした両手の先で輝きを増していく。

スターライトブレイカー……なのはの必殺魔法でナノガイガーを撃つつもりだ。

「これは……自動追尾型みたいだね」

なのはは冷静に防御態勢に移る。

「プロテクトシールド!!」

ガオガイガーのバリアの原型となったジエネシックの防御フィールドを四方に展開した。同時に爆発がナノガイガーを覆い隠した。

「む……」

パルパレーパに不審の表情が浮かぶ。

「アベルの話では、破壊神の防御は、ジエネシックオーラによる情報攻撃だったはず……」

ジエネシックガオガイガーが放つ防御フィールドは対遊星主用の技であり、いわばアンチウイルスの様な働きをする。故に、プロテクトシールドは遊星主の身体を破壊してしまう効果を持っていた。しかし、それ以外の物理／魔法攻撃への対応力は低いはずだったはずだ……

「なにがしかの改良を施してあるようだな」

レイジングハートは、プロテクトシールドに対物理／魔法攻撃に備え防御魔法の効果を織り込んでいた。《プロテクシヨNEX》などより遥かに強固な防御力で、広範囲をカバー出来る。

アクセルシューターの被害は抑えられ、傷一つつかない。そして。

なのもまた砲撃の準備を始めていた。

爆発の中から現れたナノガイガーに、ヴィオファイガーがスターライトブレイカーを解き放った。

「……デイバイン」

なのはがギガンティスハートを突き出し、唱えた。

「バスター!!!」

ぐわっ

柱のような砲撃が相手目掛けて発射される。

「っ……!!!」

デイベインバスターGXは、ヴィヴィオのスターライトブレイカーに衝突。

光の飛沫がしぶいた。

「私の砲撃を、押し返している……!!?」

ヴィヴィオは驚愕し、慌てて防御に入った。

スターライトブレイカーはデイベインバスターに飲み込まれ、ヴィオファイガーに逼迫する。

「プロテクトウォール!!!」

かざされた左手から防御力場が放出された。

バリアにデイベインバスターがぶつかると、その凄まじい衝撃にヴィオファイガーが吹き飛ばされそうになった。

「ぐあああっ」

バリアが、もたない……

「おおおおっ!!!」

ヴィヴィオは右拳にGストーンとレリックのパワーを集中させた。

「ブロウクンファントム!!!」

至近距離からの打撃。

魔力付与された勇者王の武装を、思いっきりディバインバスターに叩きつけた。

「消し飛べええ　　!!!」

崩れたエネルギーの奔流が、ヴィオフィガーを包み込んだ。星が破裂したような、まばゆい閃光が疾^{はし}る。

「ヴィヴィオ……!!!」

なのはが叫んだ。

戦っていても、やはりその身を案じてしまう。

「うっ
」

爆発の余光が舞う中、ヴィオフィガーが傷付いた姿を現した。プロテクトウォール、聖王の鎧で致命的なダメージは避けられたものの、無数の細かい損傷が装甲に見られ、右拳はヒビが走っていた。

GSライドは限界以上のパワー放出に疲弊し、ヴィヴィオの魔力も消耗が激しい。

だが、それでも彼女は戦うことを止めようとはしなかった。それが遊星主の命令だったから。

ケミカルボルトはほとんどヴィヴィオの身体に埋まっている。完全に入りきらないのは、聖王の鎧が「異物」として排斥しようとしているからだ。しかし、それでも浸蝕を食い止めることは出来ず、押し止めるのが精一杯である。

（遊星主の呪縛と戦えっっていても……私には）

ヴィヴィオはピア・デケム・ピットで語りかけてきた声を思い出していた。

声はケミカルボルトに負けず、戦えと言ったのだ。

（無理だ……身体のコントロールが……）

パルパレーパのナノマシンが彼女の神経細胞を侵し、肉体の制御を乗っ取っていた。

自我はあっても、身体は遊星主の操り人形に等しい。

（マ……マ……）

ヴィヴィオはナノガイガーを見た。

不思議とその、破壊神の貌は穏やかに微笑んでいるように感じられた。

（なのはママ、本当に私を助けられるの？ その 悪魔の力で）

もし、その疑問をなのはが聞いたとしたら、どう答えただろうか。大丈夫、と安心させるように頷いたのかもしれない。

（なのはママ……私、は ）

「何を手こずっている。悪魔王に容赦は要らぬ。貴様の力を全て使
って倒すのだ」

パルパレーパから叱責が飛ぶ。

「私の……」

ヴィヴィオが躊躇いがちに動き出した。

「なにか、まだ奥の手があるのね」

なのはは攻撃に備え、ギガンティスハートを前に突き出した。

「……来い」

ヴィヴィオが魔法を使う。

(召喚?)

魔法陣が浮かび、巨大な物体が転送されてきた。

「私の、最強ツール！」

「あれは」

間違いない。レイジングハートがギャレオンから送られた知識の内
にあったものと同じものだ。

「そうだ。その、破壊神の力で悪魔王を倒すがいい」

パルパレーパが嘲笑う。

「高町なのは、娘に倒されるのなら本望だろう……むっ!？」

突如。パルパレーパ目掛け、光条が飛んで来る。

「奴らか？」

回避したパルパレーパは、アースラの方を向いた。
アースラから砲撃が来たのだと思ったが……

「いや、攻撃はその背後から」

アースラの後方、白い戦艦が闇を裂いて登場した。

「ジェイアーク！ 追いついたか」

超弩級戦艦ジェイアーク。その威容を誇らしげに見せながら、悠然とアースラに並んだ。そしてパルパレーパに艦砲を合わせる。

「残念だが、パルパレーパ。貴様にのうのうと見物させてやる訳にはいかんのでな」

」は戦意ある声で告げた。

「ほう。欠陥品のソルダードが創造神に挑むか……面白い！」

バルパレーパの気が変わった。

「傍観者も時に退屈だな。ちょうどよい」

ケミカルフュージョン。

「アベルに代わり、貴様を処分してやろう。神に逆らった反逆者として、な」

「私もピサ・ソールへの障害となる貴様を放つてはおけんのでな。ここで貴様を倒せばピサ・ソール攻略も時間の問題」

」は隣のフェイトに頷きかけた。

「うん。いこう、」

フェイトがバルディッシュに乗せた掌を差し出す。

」はしっかりとその手を握った。

「テラフュージョン!!」

重なる力。

巨大なるゴッドジェイダーが誕生する。

「貴様が創造神と言うのなら、ゴッドジェイダーは戦の雷神!」

雷光を纏いし巨神が、翼を拡げる。

「我がいかづちが貴様を焼き尽くす!!」

「やってみるがいい！　そして、創造神に刃向かう愚を思い知る」とだ

パルパレーパ・プラスは、ゆっくりと右手のメスを持ち上げる。

「来い、雷神よ！！」

転送されて来たのは超巨大な鎚だった。

「マーグハンド！！」

鎚から離脱したパーツが巨手となってヴィオフィガーの腕に合体する。緩衝ユニットであるマーグハンドだ。勇者ロボ・ゴルディーマーグが変型したパーツだが、彼のAIはケミカルボルトにより封じられていた。

「ハンマーコネクト！！」

金色の鎚が、巨掌に握られた。

「ゴルディオン……ハンマー！！」

「ゴルディオンハンマー……！！」

金色の粒子が鎚とヴィオフィガーを輝かす。ゴルディオンハンマーとヴィオフィガーのGストーンがリンクした事で凄まじいパワーが生まれ、それが余剰エネルギーとなって機体表面に溢れ出した

のだ。

「まるでヴィータのギガントハンマーやな……」

はやてはヴィオファイガーが装備した切り札にそんな感想を抱いた。だが、ハンマー型といっても、グラーフアイゼンとは性能はまるで異なる。

ゴルディオオンハンマーの正式名称はグラヴィティショックウェーブ・ジエネレイティング・ツール。即ち「重力衝撃波発生装置」 重力波を造りだし、その中に置かれた物質を光子レベルにまで分解してしまう、強大なるツールだ。たとえ、ジエネシツクの機体といえど例外ではあるまい。

金色の破壊神が、ナノガイガーに巨大鎚を見せる。

「これは……私でもちよつと不利だね」

《Yes , Master》

「でも、負けられない。いくよ、レイジングハート！」

なのははゴルディオオンハンマーの迎撃体勢を取る。

「ママ。これで、最期よ」

金色の破壊神が巨鎚を構えた。これで、決着をつける。ヴィヴィオは涙と共に、悪魔王に立ち向かって行くのだった。

第六章 悪魔王誕生!!! (後書き)

ナノガイガーVSヴィオフィガーの戦いはまだ終わらない。
機動勇者隊と遊星主との戦いもまた……

次元世界崩壊の危機が迫るなか、勇者あるものたちの激闘。
そして、新たな仲間たちが参戦する!

次回 第七章 超魔王黙示録 続く!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674t/>

悪魔王ナノガイガー 第四部・決戦編

2011年9月29日06時41分発行